

摂食嚥下リハビリテーション学分野

教授 井上 誠

摂食嚥下リハビリテーション学分野は、平成9年、超高齢社会に向かう日本の歯科医学教育、歯科医療を担い、さらに歯科にとどまらず加齢に伴う生体の機能と構造の変化を科学する講座として、加齢歯科学講座の名前で開設されました。初代教授である野村修一先生らを中心に、翌平成10年には加齢歯科外来での臨床開始、平成11年には東京から植田耕一郎先生を助教授として迎えました。その後、平成14年の大学院改組により摂食嚥下障害学分野と分野名を変更、平成16年に山田好秋先生が2代目の教授（兼任）となり、平成18年には、分野の名称を摂食嚥下リハビリテーション学分野に変更、平成20年には私が教授となり、現在に至ります。平成28年度の分野構成員は、辻村恭憲准教授、真柄仁講師、伊藤加代子、辻光順、白石成（平成28年8月末まで留学中）の各助教、竹石龍右歯学部特任助教、船山さおり、酒井翔梧、渡邊賢礼（平成28年9月助教昇任予定）の医員3名、大学院生13名、研究補助員4名、学部内非常勤講師6名、学外非常勤講師9名、他にも多くの研修登録医で運営しています（図1）。

平成10年に加齢歯科外来が開設されて以降は、外来・病棟における口腔ケアを中心とした臨床を行ってきました。平成18年1月、新潟大学医歯学



図1 教室員

総合病院の中央診療部門である摂食嚥下機能回復部管理下に、当時新築されたばかりの東病棟2階の総合リハビリテーションセンターに隣接して摂食嚥下リハビリテーション室が開設され、入院患者様の摂食嚥下障害への臨床的介入が本格的に始まりました。同時期に、医科病棟や総合リハビリテーションセンターのリハビリ医ならびに言語聴覚士とのカンファレンスも開始されました。当時は知られることの少なかった摂食嚥下障害に対する臨床介入ですが、誤嚥性肺炎予防効果や喫食率増加が明らかとなり、早期退院・転院が可能となるケースが増えたことで、紹介患者数は順調に増加していきました。平成16年には94人であった摂食嚥下障害の紹介新患数は、平成27年には414人まで増加しています。現在の診療部門は、入院患者、外来患者の担当をそれぞれ摂食嚥下機能回復部、口腔リハビリテーション科が担当しています。また、平成9年の加齢歯科学講座発足当初から、高齢者の罹患率が多いドライマウスや味覚障害の臨床を担当する専門外来（平成11年味覚外来開設、平成16年ドライマウス外来開設）を設置しています。

歯科医療を含めた摂食嚥下リハビリテーションに係るEBMの構築、歯科医学教育においては、加齢歯科学、摂食嚥下リハビリテーションに係る教育科目での全国に通用するカリキュラムの構築が当面の課題だと考えています。摂食嚥下リハビリテーション専門医が少ない状況の中で、既存の歯科臨床とは異なる歯科としてのリハビリテーションの現場を学部学生にも経験してもらっています。また、週に1回、高齢者施設を訪問し、口腔ケアや食事介助の場면을体験する学外実習も行っています。

平成16年に山田好秋教授、平成20年に私が教授に就任して以降は、医科との共同研究や摂食嚥下

に関わる末梢と中枢の神経機構解明のための神経生理学的研究を進めています。医科歯科連携によって実現した臨床・基礎研究の成果を含めて、平成16年以降、国際誌に105編の英文論文を発表し、平成22年には辻村恭憲現准教授が歯科基礎医学会賞を獲得したのをはじめとして、計27回の学術賞を受賞、さらに基礎・臨床研究の成果発表に対し、国際学会におけるシンポジストとして数々の招待を受け、講演実績をあげています。平成24年には経済産業省の課題解決型医療機器等開発事業にも参画するなど、基礎研究で培われた成果の臨床応用に向けた取り組みを行っています。

また、若手研究者派遣プログラムにより、平成22年に福原孝子先生が、平成24年には谷口裕重先生が、平成25年には辻村恭憲先生が、いずれも米国Johns Hopkins Universityへ留学しました。さらに、平成25年には日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」に採択されて計6名を海外派遣することができ、平成28年現在も米国Johns Hopkins University、University of Manchester、University of Chicagoとの共同研究を続けています。

超高齢社会の中、口腔のQOLの向上を目指した摂食嚥下研究の実績を活かして、地域歯科医に対する臨床研修を行うことで地域医療への貢献も果たしています。新潟県における摂食嚥下リハビリテーションの普及を目指した開業医支援事業は平成25年三菱財団社会福祉事業として採択され、これを受けて平成27年には開業医研修が在宅者歯科医療支援事業に加えられました（図2）。こうした地域貢献事業の取り組みはマスコミにもTV



図2 嚥下内視鏡研修会

出演、ラジオ出演、新聞での特集記事掲載等で取り上げられました。

大学発となる研究シーズを元に、新たな歯科医療技術の開発・実用化や医療水準の向上を目指した産学共同研究を推進し、異分野間の技術者交流、企業ニーズの把握、大学からのシーズ提供を通して地場産業の「技術革新」と「社会貢献」を行っています。その加速化を目指して、平成27年には歯学部内に産学連携のプラットフォームとすべく、新たに「食品開発・評価ラボ」を立ち上げました。以上の成果によって国際食品工業展アカデミックプラザでは2回の優秀賞を受賞しました。さらに、大学と企業との共同研究、JSTの競争的資金獲得などを果たしたほか、超高齢社会における介護食・食器具、口腔ケア用品の開発にも携わっています。また、日本で初めて大学病院に設置された介護食や食器具の展示・試用コーナーは、「食の支援ステーション」（図3）として地域のみならず日本中に広く知られることとなり、その取り組みは新潟日報や朝日新聞にも掲載されました。

平成16年9月に当時の教授であった山田好秋先生を大会長とする日本摂食嚥下リハビリテーション学会第10回学術大会が新潟で開催されました。そして本年、平成28年9月には私が大会長を務めさせていただいて、日本摂食嚥下リハビリテーション学会第22回学術大会を開催いたします。これからの歯科における本臨床分野を支え、さらに発展させるため、これからもまだまだ走り続けます。皆様には、今後ともより一層のご指導・ご鞭撻のほどお願い申し上げます。



図3 外来棟エントランス階 食の支援ステーション